明和町と『大和物語』

『大和物語』は、平安時代半ばに宇多天皇周辺の女房が作って成立したと考えられているもので、和歌にまつわる説話を集めた歌物語という形式の短編小説集です。

章段ごとにさまざまな人物が登場する物語で、醍醐天皇の斎王・柔子内親王と、朱雀天皇の斎王・雅子内親王の二人が登場します。

柔子内親王

36 段に登場し、斎宮に勅使として派遣された藤原兼輔が帰京する際に詠んだ歌にまつわる内容です。

兼輔は斎宮を去るときに

「くれ竹のよよの都と聞くからに　君は千歳のうたがひもなし」

と詠み、斎宮がある「多気郡」と常若のシンボルである竹をかけて、斎王柔子の長寿を祝いました。

この歌のとおり、斎王柔子は 33 年間もの長い間、斎王を務めました。

雅子内親王

93 段に登場し、雅子内親王の悲恋を描いています。

雅子は承平元年（932）に 22 歳で斎王に選ばれましたが、数年後に母の死によって斎王を退きました。

その後、天慶 2 年（939）に藤原師輔に嫁ぎ、四人の子供をもうけました。

雅子には斎王に選ばれる前に藤原敦忠という恋人がいましたが、斎王となったため別れることになりました。

「いせの海千尋の浜にひろふとも　今はかひなく思ほゆるかな」

（伊勢の海の長い浜で貝を拾っても、あなたが伊勢の斎宮にお決まりになった今となっては、甲斐のないことと思われます）

キーワード：文学、大和物語、柔子内親王、雅子内親王、斎宮、斎王